

「お坊さんに憧れてお寺に入ったの」という私が、作詞作曲した唄があります。ある人から、「この曲はあなたにしか歌えない。嘘のないあなた自身の言葉だから」と言われたことがあるほど、私をリアルに示している唄です。その唄のとおり、お寺と全く関係のなかった私が僧侶となり、お寺で参拝者の納骨や読経受付、案内の仕事とおして、大切な人と別れていくこと、もう一度大切な人と出遇っていく世界に遇わせてもらってききました。

幼い頃から感受性が強く、情緒不安定だった私は、六歳の時、両親が離婚したために、独身の叔母の養女となりました。友だちから「お父さんのいない子とは遊べな

い」と言われ、いじめられたことによつて、心と身体のパランスを崩してしまひました。自律神経失調症になり、小学校の時、あるお寺にあずけられました。嫌々行つたそのお寺で、今までの自分がひっくり返るような言葉を聴くことになりました。「蟻も野草も蟬もあなただと同じいのち」。

今まで聴いたことのな

い「いのちの平等」を説く仏の教えは、私に驚きと感動を与えてくれました。死んでしまいたいと思つていた私は、幼い頃からずっと悩み続けてきた「何のために生まれてきたのか」を、お坊さんなら教えてくれるかもしれないと思ひました。それから、真実の教えに出遇いたいと、人を求め

生きてきました。そんな私に周りの人は奇異の声をあげましたが、そうしないではおれない何かが、私には確かにあったのです。「それは人間の根源的ないのちの要求である」と私に教えてくださる方との出遇いがありました。親鸞聖人が課題とした「生死出づべき道を自分の課題として、親鸞さまに出遇えたいのちの不思議を何回も何回も初ごとのように語っておられた和田桐先生に遇わせてもらったのです。

人は、その出遇いによつて一生が決まると思います。先生に出遇うことができたことの不思議をこの身に感じます。先生は、「不思議の感覚が仏法なんだ」と言われていました。不思議という

様々な課題を抱える人たちのこともまた、国や性別や考え方の差異を超えて、「あなたがいて私がいる」「関わりの中で自分が生きている」と鎖けたのです。それは、周りと自分を比べ、無理に同じにする必要のない、良縁（よゐぎ）か悪いかで計らない世界をともに生きている事実でした。私の中の思いを超えて、「私が私で本当によかった」という出遇いをいただいたのです。

「吾当に世において無上（むじやう）となるべし」（『仏說無量寿經』）という言葉は、この世に生を受けたありとあらゆる存在のかけがえのない尊さを示しています。赤ん坊の「おぎゃあ」と叫ぶその産声は、その名告りに聞えてきます。それは

「箱根示現」

- ①箱根神社
②神官
③親鸞聖人
④西仏房と蓮位房

繪解親鸞聖人繪伝 28

親鸞聖人繪伝下巻第四段「箱根示現」

親鸞聖人は、六十歳を過ぎた一二三四（文暦元）年に、十年に及ぶ関東での教化を切り上げ、西仏房・蓮位房を呼んで京への途につかれました。妻の恵信尼は聖人に同行せず、娘や孫のいる越後へ帰りました。

関東からの帰洛の途中、難所の箱根の山越えが夜陰になつてしまいました。ようやく明け方近くなつて人屋が見えなつてきました。すると突然、白髪びやくはの神官が慌てて走り出て来て、「どうぞ、今夜はこちらでお休みください」と言いま

す。聖人が尋ねると、神官は「神楽かぐらを終えてつかれ転落うたがひをしていますと、夢に権現様が現れて、わたしに敬い申し上げる大切な方がお通りになるから、丁重におもてなしするように」と、お告げをされたのです。驚いて外に出てみると、あなたの方の姿があつたのです。あなた様はただ人ではないでしょう」と言いました。

お念仏を勧める聖人を、神も証誠護念してくださった
という話です。

いのちの花を咲かせよう

鈴木 木君代

（略歴）
京都市生まれ。真宗大谷派山形教区念通寺衆徒。シンガーソングライター。代表曲に「お坊さんに憧れてお寺に入ったの」、「いのちの花を咲かせよう」。CD「いのちのうた」を、あなたに遇いたい」などがある。

らったのです。

そのような世界に出遇わせていただくことによつて、自分と同じように様々な悩みを持ちながら現実の社会で生活し、

が、哀しいときにも苦しいときにも、歩きつづける力を与え続けてくれているのです。自分も含めて「生まれてくれてありがとう」という声を聴き

ん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す」とあるように、大きな願いをこめて厳修するものではないかと思ひます。

いま私たちが、宗祖親鸞聖人が開かれた念仏の教えに出遇へた喜びを、次

ん。暗い闇を晴らして、人生を歩んでいけることを、同朋会運動を通して次の世代に伝えていくことが使命ではないかと思えます。

今年は、御遠忌に向けて具体的な歩み出しを行う大事な年です。皆様のご

も、当然のことではなく、不思議なこと。そのことを意識すること、経験することの一切が不思議で、不思議な生を今、生きていくことを教えても

けてくる声です。あらゆるものにはたつき続けている仏の呼びかけの声です。その声をとみに聴き続けていくしかありません。この確かな出遇い

が決定いたしました。具体的な内容は、まだ、決定していません。御遠慮法要は、次の世代にお念仏の教えを手渡す大事な法要です。単に法要を勤めるのではなく、「教行信証」に「前に生まれん者は後を導き、後に生まれ

を傷つけ、弱いものを切り捨てているか。まさに「三塗の黒闇」のなかに埋没しています。そのような社会だからこそ、親鸞聖人の聞かれたお念仏の教えを聞き開き、仏様から願われているわたしに向き合っていくかねばなりません。


 No.282
 2013年1月20日

発行 真宗大谷派 高山教務所
 発行者 大町 慶華
 〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
 ☎(0577)32-0776
 *毎月20日発行 50,000部
 三市一郡無料配布
 印刷 山都印刷株式会社

不思議の感覚、それを阿弥陀というのだと。不思議光如来とは、私に不思議の感覚をもたらしにくださるはたらきそのものだと言っておられました。こうして生まれてきたことも、死んでいくこ

あなたか誰とも代わる（？）との出来ないあなたとして存在する声です。そして、いつでも悩み迷う私に「あなたがあなたであればいい。あなたはあなたにしか咲かせることのできないのちの花を咲

高山教務所長
高山別院輪番
大町 慶華

あけましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い申し上げます。

教区・別院の御遠忌法要について

ないかと思ひます。

現代の社会は、経済至上主義であります。損が得かで物事を判断し、答を導く考え方が蔓延しています。本当に大事なことを忘れ、自己中心的な生

『ひだご坊』は毎月20日に発行されます。

親鸞聖人の往生を確信させるために記した第二の証文(「恵信尼消息」第三通後半)は、一二〇一(建仁二)年の第一の証文から十三年後の一二一四(建保二)年にまで一気に飛んでいる。「さて常陸の下妻と申し候う所に」と始まる後半は、前半と墨の色が違っているの、別の日に記筆したのではないかと推定される。聖人が四十二歳、恵信尼が三十三歳の時点であり、その内容は、恵信尼自身が常陸の下妻で見た夢の話である。

この十三年の間に、聖人の身にも、恵信尼にも大変な出来事が起こっている。既に述べた通り、一二〇四(元久一)年比叡山の批難に対して、法然が応えた「七箇条制誡」に署名し、翌一二〇五(元久二)年法然より「選撰集」の書写と真影の図画を許され、一二〇七(建永二)年、僧四人の斬首にまで及んだ承元の法難で、上人と同じく遠流に処せられ、一二一一(建暦一)年まで足掛け五年、越後で罪人の生活を余儀なくされた。さらに一二一二(建暦二)年には、生涯の師法然上人の御命終があった。恵信尼も、流罪人の妻妾は流刑地に同道すべきであるとする「獄令」第十一條の規則に従って、越後にきたのではないかと推定され、赦免前の一二一一(承元五)年、「信連房は未の年三月三日の昼、生まれて候いし」(第五通)とある記述によって、明信が越後で生まれたことだけがわかる。越後には、後

主都宮頼朝の可能性が考えられている。頼朝は、同じ法然の門弟で、実信房蓮生の法名を持つ。しかし、師法然亡き後、師教に応答して製作されていく「教行信証」等の著作を考えた場合、より根本的な目的があったのではないかと推定される。一二八九(文治五)年源頼朝が奥州藤原氏を討討して、平泉の大長寿院を模し、鎌倉に永福寺二階堂を建てて以後、平泉文化(特に「紺紙金銀交書一切経」や「宋版一切経」)を踏襲するような一切経会が、鎌倉の寺社で盛んに行われる。流罪を許された一二一一(建暦二)年には、その永福寺で宋本五千余巻の供養会が催され、以後恒例化していく。当時一切経が揃っていたのは、畿内と筑前を除けば、平泉と鎌倉ではない。後になるが、その鎌倉をまわって一二五五(建長七)年笠間時朝によって常陸の鹿島神宮に「宋版一切経」が納められた。所蔵時期は不明であるが、聖人が移り住んだ稲田から直線距離で十五キロ程の真壁町の最勝王寺に、「宋版一切経」五一九五巻が現存している(笠間稲荷神社も現在三巻所蔵)。常陸は、未開の地ではなく、一切経を披閱できる数少ない文化の地であったようである。承元の弾圧によって大きな打撃を受け、真宗興隆の大相法然亡き後、選撰本願の念仏の教義を開顕し未来に伝える方途は、瀕死の状態と言わざるを得ない。その使命に立ち上る親鸞の姿が、恵信尼に強い印象を与えたのである。



に、無理を承知で関東に移住するのであるか。すぐ京に戻らなかった理由は、一つには師を失ったということがある、二つには赦免直後の身では行動が制約されることを危惧してと考えられる。では未知である常陸を何故選んだのか。三善家の所領のある越後に留まるという選択肢もあったはずである。一家が未知の関東で生き抜けるような生活の保証という点から、諸説が提案されている。例えば迎え入れてくれる井上善性等の帰依者とか、常陸国笠間郡の領

主都宮頼朝の可能性が考えられている。頼朝は、同じ法然の門弟で、実信房蓮生の法名を持つ。しかし、師法然亡き後、師教に応答して製作されていく「教行信証」等の著作を考えた場合、より根本的な目的があったのではないかと推定される。一二八九(文治五)年源頼朝が奥州藤原氏を討討して、平泉の大長寿院を模し、鎌倉に永福寺二階堂を建てて以後、平泉文化(特に「紺紙金銀交書一切経」や「宋版一切経」)を踏襲するような一切経会が、鎌倉の寺社で盛んに行われる。流罪を許された一二一一(建暦二)年には、その永福寺で宋本五千余巻の供養会が催され、以後恒例化していく。当時一切経が揃っていたのは、畿内と筑前を除けば、平泉と鎌倉ではない。後になるが、その鎌倉をまわって一二五五(建長七)年笠間時朝によって常陸の鹿島神宮に「宋版一切経」が納められた。所蔵時期は不明であるが、聖人が移り住んだ稲田から直線距離で十五キロ程の真壁町の最勝王寺に、「宋版一切経」五一九五巻が現存している(笠間稲荷神社も現在三巻所蔵)。常陸は、未開の地ではなく、一切経を披閱できる数少ない文化の地であったようである。承元の弾圧によって大きな打撃を受け、真宗興隆の大相法然亡き後、選撰本願の念仏の教義を開顕し未来に伝える方途は、瀕死の状態と言わざるを得ない。その使命に立ち上る親鸞の姿が、恵信尼に強い印象を与えたのである。

に、無理を承知で関東に移住するのであるか。すぐ京に戻らなかった理由は、一つには師を失ったということがある、二つには赦免直後の身では行動が制約されることを危惧してと考えられる。では未知である常陸を何故選んだのか。三善家の所領のある越後に留まるという選択肢もあったはずである。一家が未知の関東で生き抜けるような生活の保証という点から、諸説が提案されている。例えば迎え入れてくれる井上善性等の帰依者とか、常陸国笠間郡の領

第31回 別院真宗公開講座

【第3回・4回】
講師 三明智彰氏
(九州大谷短期大学副学長)

第3回

日時 1月22日(火)
午後2時~4時
講題 「浄土における寿命について」

第4回

日時 2月25日(月)
午後2時~4時
講題 「ただ念仏のみの慈悲」

聖教学習会

日時 2月18日(月)
午後1時30分~午後4時30分
講師 安富信哉氏
(大谷大学特別任用教授)
講題 「唯信鈔」講義
―法然から親鸞へ―

婦人間法会

日時 2月6日(水)
午後1時から
会場 高山別院御坊会館
講師 馬川透氏
(高岡教区真教寺)
講題 「本願の名号」
会費 2000円
主催 高山二組坊守会

東本願寺創立の上人 教如上人四百回忌法要団体参拝のご案内

今年は真宗大谷派第十二代教如上人の四百回忌にあたり、本山では4月の春の法要に併せて「教如上人四百回忌法要」が動きます。高山別院でも団体参拝を予定しておりますので、ぜひご参加ください。
ご希望の方は、高山別院までお申し込みください。

期 日 4月3日(水)【日帰り】
日 程 午後2時 速夜法要参拝 ほか
参加費 10,000円
締 切 2月28日(木)

参加者募集 定員：200名
※定員になり次第締め切り

真宗本願(東本願寺)収骨団体参拝 参加者募集

真宗本願収骨とは、京都東本願寺の親鸞聖人の御真影が安置される御影堂にご遺骨をお収めすることです。収骨を行うには、相続講金を納めることにより発行される収骨證が必要です。
ご希望の方は、お手次のお寺までお申し込みください。

期 間 3月2日(土)~3日(日)【1泊2日】
日 程 渉成園にてお斎、真宗本願法話、収骨、見学、大谷祖廟参拝など
宿 泊 アパホテル京都駅前
定 員 30名 ※定員になり次第締め切り
参加費 お一人28,000円
締 切 2月6日(水)

住職の言葉

念仏を称えるということ
莊川組 了宗寺 梅野 明秀

親鸞聖人は法然上人との出会いにより、念仏を称えることによってだれでも往生できるという確信を得た。しかし念仏さえ称えていけばよいのではなく、自らを省みることが必要です。念仏さえ称えればよいという考えだと、極端に理解すると念仏さえ称えれば、あとは何をしてもよいという事になってしまいます。

しかし親鸞聖人は、業があるといつて毒を飲んではならないと言っておられます。我々は、自分の本質を見る事がなかなか出来ません。それは今まで

の環境による自分の価値観によって、良い悪いを決めているからです。真宗ではお聖教を読む事によって、いかに我にしばられている自分であるかと気付かされるものなのです。そんな自分の価値観を壊し真実に会わせていただくことが、真宗なのです。

「仏説無量寿経」というお経には、阿弥陀仏が仏になるときに、たてられた四十八願があります。その四十八願のうちの第十八願では、念仏によって浄土往生ができる道があると云われます。阿弥陀仏は私たちを見捨ててはくれません。煩惱だらけの私たちをいつも見守ってくださるのです。私たちは、その阿弥陀仏がすべての人を救おうとしていることを、信じ、仏への感謝の気持ちで念仏を称えることが大事なのです。